

扉とびら

幸徳環境設計

確かにあった。

ここに、扉が……。

木枯らしに誘われ、ここにきた。

舞い散る落ち葉のように、吹かれ揺られ、
ただただ気の向くまま、風に背中を押される
ように、ふわりふわりとやってきた。

木枯らしも落ちつき、ふと立ち止まると、

そこには、白い扉があった。

それは古めかしい木製の扉で、全面が白い
ペンキで塗られている。しかし、かなりの年月、
風雨に晒されてきたのだらう、自然木ほんら
いの色と木目が、砂丘を彩る風紋のように浮
かびあがっている。

また、扉とびらの中央ちゅうおう、目線めせんの高さたかには、何なにやら奇妙きみょうな紋様もんようが彫ほられていて、それは、欧州おうしゅうの城しろに刻きざまれている貴族きぞくの紋章もんしょうのように見みてとれる。扉全体とびらぜんたいが何なにか妖あやしげではあるが、格調かくちよう高いものであることには変かわりない。

そして、扉とびらの左側ひだりがわには、扉全体とびらぜんたいの調和ちようわを乱みだすことがないように、マッシュルームのような形かたちをした金色こんじきのドアノブひかが、控ひかえ目めにちよこんと付ついている。

いつしかぼくは、その扉とびらに吸すい込まれるような錯覚さっかくを覚おぼえ、無意識むいしきのうちに扉とびらをノックしていた。

『コンコン、コンコン』と、扉とびらを四回よんかい、ノックした。

『どうぞ、お入はいりください。鍵かぎはかかっていますから』

扉とびらの向むこうから、細ほそい声こえではあるが、はっきりとした口調くちようで、とても優やさしげな、少女しょうじょの声こえがした。

まさか、人ひとがいるなんて……。

ぼくはしばらく、扉の前に立ち竦んでいた。頭の中が真っ白になってしまったのである。また何かを期待していたのかもしれない。するとまた、扉の向こうから、先ほどと同じ少女の声が出た。

「どうぞ、遠慮なさらずにお入りください」
今度も同じように細かい声で、とても優しいではあったが、やや口調が強くなっているように思えた。

ぼくは、高なる鼓動を抑えることができないまま、言われるがままに、惹かれ誘われるかのように、金色のドアノブをしっかりと握り、ゆっくりと回し、そおと扉を開けた。

そして扉を背に一步はいると、花の香りがほのかにした。さらに一步、二メートルほど先に、白いワンピースを着た可憐な少女が、背もたれもない丸い木製の椅子に凜として腰をかけていた。

ぼくは、扉を背に二歩、進んだところで立ち止まった。

ぼくは少女の前で、茫然と立ち尽くし、茫然と、ただただ少女を見つめていた。これ以上、少女に近づくことはできない。そう、一步も前に進むことはできない。見えない壁が、ぼくを拒んでいるかのようだった。

すると少女は、薄く、少し冷たさを感じさせる口元を緩め、透きとおるように白く、細い右手を差し出し、優しく微笑み言った。

「どうぞ、お掛けください」

甘い花の香りがした。差し出された右手の先には、少女が座っているものと同じ、背もたれのない丸い木製の椅子が置かれていた。

その時、ぼくは初めて、そこに椅子が置かれているのに気づくとともに、少女以外の周りの様子、部屋の状況を確認した。今まで、花の香りのほかに、少女以外のもの全てが、目に入っていないなかったことに気づいた。

そしてぼくは、軽く息を吐き、少女に言われるがまま、ゆっくりゆったりと、その丸い椅子に腰を下ろした。

甘い花の香りがした。

目の前には、少女がいる。

ただただ少女を見つめる。

少女も、ぼくと同じように、ぼくを見つめ

ている。ただぼくと違い、少女は口元を緩め

微笑んでいるように見える。

今、この空間には、少女とぼくの二人だけ

しか存在しない。そして、同じ時間を共有し

ている。決して沈黙ではない、静寂。少しずつ

つほぐされていくぼくの鼓動。

少女の髪、長くもなく短くもない。肩まで

まっすぐ垂れ下った栗色の細くつやのある髪。

顔全体の作りはこぢんまりとした感じではあ

るが、目元が印象的で切れ長の目は吊り上つ

ているわけでもなく、垂れ下がっているわけ

でもなく、まっすぐ、こめかみのあたりまで眼

尻が達しているようにも見てとれる。その眼

尻が少し緩んでいる様子から、作り笑顔では

ないことがうかがえる。瞳は澄んだ栗色で、吸

い込まれそうな深さが感じられる。

こんな空間、こんな時間を、ぼくは初めて
経験した。ゆっくりとゆったりと流れる空間
と時間。そして、何よりも大切に貴重な時間
あることは間違いない。よく見ると、少女の
栗色の瞳には、ぼくだけが映っている。

終わりにたくない……。
ずっと、このままで……。

けれどそんな時間に終止符が打たれたのは、
少女の何気ない仕草ひとつであった。

突然、少女は左手を差し示した。先ほど同
じように、透きとおるように白く細い手を。
その先には、ぼくが先ほど入ってきた扉があ
る。

ぼくは、何も言わない少女の仕草と表情で、
この時間の終わりを察した。

ぼくは、視線を少女の目から自分の足もと
に移すと、入ってきた時とは対照的に、さつ
と腰を上げると、足早に扉へ向かって出て行
った。振り返りたかった。けれど、振り返
ることが出来ないまま、扉を後にした。

これが、少女との初めての出逢いであった。
あれから一週間、今でもはつきりと少女の瞳と部屋の中に漂っていた花の香りは覚えて
いる。そう、あの栗色の瞳と香りを。けれど瞳以外、それ以外の少女の容姿や部屋の中の様子については、今ではもう、おぼろげにな
っている。

きつと、夢だったのだろう……。

あれから一か月、少女と出逢った日からひと月。ぼくは、いつものように学校から帰ってくる
と、かばんの中身を取り出し、机の上
置くと、椅子に座って目を閉じた。

あの日からずっとそうである。目を閉じると、直ぐに少女の瞳が、ぼくの前頭葉に映し出される。

少女のことはあれから、自分の中では、夢だった
と言いついて聞かせてきた。けれど、自分の気持ち
をこれ以上、ごまかすことはできない。

少女のあの栗色の瞳が愛おしい、少女のあのしなやかな髪が愛おしい、少女のあの涼しげな口元が愛おしい、少女のあの白く細い指先が愛おしい、ぼくの中の少女の全てが愛おしい。気持ちいが、気持ちいが抑えられない。

あれは夢、夢であつたはずである。けれど、夢とは思いたくない。

窓際に立ち、部屋の窓を開け放つ。北風が、落ち葉と一緒に、冷気に包まれた甘い花の香りを運んできた。

甘い花の香り、忘れもしない、この香り。

北風が届けてくれた甘い花の香りに誘われ、ぼくはきた。もう一度、あの扉の前に。

やはり扉はあつたのだ。夢と思ひ込んでいた扉が。熱いものが腹の底からこみ上げる。胸の鼓動が高鳴る。

そしてぼくは、初めてきた時と同じように、『コンコン、コンコン』と、扉を四回、ノックした。

『どうぞ、お入りください』

待ち望んでいた声、少女のやさしげな声、愛おしい声が扉の向こうから聞こえてきた。

ぼくは、直ぐにでも目の前の白い扉の向こうへ、行きたい気持ちでいっぱいになったが、扉が、その厚い扉がぼくを遮る。

目の前の、扉に深く刻まれた紋様が目に留まる。その紋様に、気持ちが吸い込まれそうになる。ドアノブにかけた指先が微かに震えている。心臓が苦し紛れに唸り声をあげる。体内に血液を送り続ける音が『ドクン、ドクン』と、耳にこだまする。

ドアノブにかけていた手を下し、手の平をズボンで拭う。大きく長い一呼吸。もう一度、ドアノブに手をかける。もう手の震えは止まった。そしてしっかりと握ったドアノブを右に回し、『ギイー』という軋む音と重量感を確認しながら、ゆっくりと扉を開け放つ。

閉まりかけた扉を背に一歩前に進み出る。そして、前方をしっかりと見据える。

「こんにちはは、どうぞお掛けください」
少女の発した声と共に、甘い花の香りがした。

「こんにちはは」

ぼくは、応えた。自然と声がでた。単なる挨拶に過ぎないが、少女との距離が近づいたような気になった。けれど、つぎの言葉が続かない。まったく思いつかない。ただただ、少女を見つめる。

少女も、ぼくを見つめている。口元を緩め微笑んでいるように見える。少女の栗色の瞳に、ぼくが映っている。小さく、小さいけれど、確かに少女の瞳の中には、ぼくがいる。

ぼくは、少女に同化する。少女が、ぼくに同化する。

小川のせせらぎ、鳥の声、甘い花の香りの中に、僅かに感じる新緑の淡い匂い。南風が頬をつつたう。そんな、そんな春めいた時間、流れるような時間、現実からほど遠い世界、そんな空間に身をゆだねているようだ。

少女の口元が少し締まったような気がする。
小さく丸みをおびたあご。わずかに肩にかか
る栗色の少女の髪。肩ひもで胸元からひざの
下までをすっぽりと覆う、真っ白な品のよい
ワンピース。揃えられた膝の上に、重ねてお
かれた細くて白い指先は、まっすぐに伸びて
いる。

ぼくの目が、その美しい指先に目が止まる。
重ねて上に置かれた少女の左の手が、僅か
に左にそれ、ふわっと浮く。その手が九十度、
そり返る。ぼくの視線から視界から、その手が
束の間、消える。
逃した視界の中から、また少女の左手を捕
まえる。その先には、ぼくが入ってきた扉が
ある。

ぼくは、この時間の終わりを察した。
これが、ぼくと少女との、二回目の出逢い
であった。

やはり、夢だったのか……。

学校帰りの国道を、自転車通学の女子高生が、のっそりと歩くぼくの横を通り過ぎていく。女子高生のマフラーが風になびく。まるで亡霊のように歩いているぼくに、勇気をだせと手を振っているかのよう。ふとぼくが、斜め左前方に視線を移すと、歩道の植樹帯に植えられている丸裸のケヤキの木から垂れ下がっているミノムシが、気持ちよさそうに北風に揺られていた。きっと、小枝を集めて作られた蓑、そう、部屋の中でミノムシは、ぬくぬくと寝ているのだろう。ぼくの丸くなっていった背筋が伸びる。しつかりと、前方を見すえる。一五〇メートルほど先の交差点、右に曲がれば、ぼくの家。左に曲がり二キロメートルくらい歩けば、あの場所がある。ぼくは、決心した。昨日のことをもう一度、確かめたい。夢ではないということ。そしてぼくは、また古びた白い扉の前にきた。

『コンコン』、扉を二回、ノックする。

するとこれまでと同じように、扉の向こうから、あの少女の声がした。

「どうぞ、お入りください」

ぼくは、その声を聞くなり、急いで扉を開け放ち、少女の目の前に立った。

少女はいつもと変わらない微笑みをたたえたまま言った。

「こんにちは、お元気でしたか。どうぞ、お掛けください」

するとぼくも、自然に声がでた。

「はい、元気でした。あなたも、元気でしたか」

けれど少女の返事はなく、またこれまでと同じように、ただ微笑み、ぼくの目をじっと見ているだけだった。ぼくも、これまでと同じように、ただただ少女の瞳の中に映る自分の姿を見つめる。

今頃になって、ぼくは香りに気づいた。甘い花の香りに。

ゆるやかな時間が流れる。少女の栗色の髪。
一本、一本、目で追う。その髪の毛の先が、わずかに肩に触れている。少女の息遣いにあわせ、肩がわずかに揺れる。艶のある髪がしなる。真っ白なワンピースの肩ひもが目にとまる。あらわになつた肩が、冬の寒さを感じさせない。春の自然な暖かさが、ここにはある。小春日和、そう、そんな感じである。

少女は、相変わらず黙ったまま微笑んでいる、相変わらずぼくを見つめている。少し冷たさを感じさせる薄い口元が、真一文字になつた感じがした。視線を下ろす。

少女の左手が、扉の方に向けられていた。しかし、その時のぼくは、何がそうさせたのかは分からないが、少女の手を、扉の方に向けられた彼女の手を、透きとおるように白く細い指先を、ぼくは両手で握っていた。両手でしっかりと包み込むように握っていた。大切なものを、誰にも盗られないように握っていた。

少女の顔は、明らかに困惑に溢れた形相になつていた。目が、瞳が怯えているように見とれる。微笑みは消え、ぼくに隣れむような眼差しを向けている。

ぼくは、自分自身の行動に驚いていたが、少女の、彼女の、ぼくに対する眼差しに驚愕し、落胆した。

そして、ぼくは振り返ることもなく、その部屋を、扉を後にした。

これが、少女との三回目の出逢いであつた。

ぼくはあくる日、またその古びた白い扉の前^{まえ}にきた。

昨日のことが、頭をよぎる。あの少女の目、ぼくを蔑むように見た目、怯えた目が、ぼくの脳裏から離れない。昨日のことを、後悔している。けれど、時間は戻らない。後悔したところで、少女の瞳が、忘れさせてはくれない。ただただ、扉の前で、茫然と立ちつくしていた。

時間じかんが、ただただ過ぎていく。このまま何もなにもないで、戻ろうと思おもった。少女しょうじょのこと、彼女かのじょのこことを、このまま忘れようと思おもった。

けれど、扉とびらから目めを離はなすことができない。そして、未練みれんがましく扉とびらを二回にかいノックした。『コンコン』と。

けれど、扉とびらの向むこうから、少女しょうじょの声こえが返かえってくることはなかった。

もう一度いちど、未練みれんがましく扉とびらを二回にかい、ノックする。『コンコン』と。

けれどやはり、返事へんじはなかった。

ぼくは思おもいきって、扉とびらを開あけようとした。

『ガチャガチャ、ガチャガチャ』

開あかない。

『ガチャガチャ、ガチャガチャ』

その厚あつい扉とびらは、固かたく閉とざされていた。

そしてぼくは諦あきらめて、その扉とびらを後あとにした。

気が付つくと、その年としは終おわろうとしていた。

背せ中に北風きたかぜを受け、その北風きたかぜが、ぼくのうすつぺらな体からだを通とおり抜ぬけていくようであった。

年は明け、その年の冬は例年になく冷え込んだ。まるで、少女との四回目の出逢いを果たすことができなかった、ぼくの心の中のように。

ぼくは、四回目の訪問の後、しばらく何も考えることができなくなっていた。いや、考えることを放棄したのである。都合の良いように考えただけである。忘れることにしよう、夢であつたことにしようと、自分に言い聞かせただけである。

そう、時間は過ぎるものである。人間なんて所詮、忘れる生き物である。誰もが言う、時間が経てば忘れるものだ。

たしかに、時間の経過とともに少し少し忘れてはきている。そう、そう思っているもの、いつまでたっても、何か判然としない。何に対しても、やる気がおきないのである。一日、一日を何もできずに浪費していく。ただただ、時間だけを消し去っていく。

学校帰りの国道をゆっくりと歩く。いつものようにぼくの横を、自転車通学の女子高生が颯爽と追いついて越して行く。つい最近まで彼女の首に巻かれていたマフラーはすでになく、代わりにスカートのすそが、春風になびいている。

自然に、視線を左側の山側に移す。山並みの手前には小川が流れている。ここからは、その小川については確認することはできないが、小川に沿って整備されている散策道は見えてとれる。先週末までは、その散策道沿いに所々植えられたソメイヨシノの花が、まるでピンクのダイアモンドを散りばめたように咲き乱れていた。けれど今ではすっかり、その面影すら残さず、背面の山並みの緑一色に塗りつぶされている。

春風が、頬をつたう。
鼻腔をくすぐる、甘い花の香りがした。
どこかで嗅いだ、香り。懐かしい香り。
とても愛おしい香り。

春風はるかぜに、甘い花あまはなの香かおりに誘さそわれ、また、こ
こにきた。もう一度いちどだけ、自分じぶんを確認かくにんするた
めに、自分じぶんを見つめるために、ここにきた。
春風はるかぜに後押あとおしされたのは事実じじつである。しか
し、自分じぶんの足あし、自分じぶんの意思いしで、ここにきたの
は確たしかである。自分じぶんから逃にげずにきたのは確たし
かである。

けれど、その場所ばしょに扉とびらはなかった。確たしかに、
この場所ばしょに存在そんざいしていたはずの、あの古ふるびた
白しろい扉とびらはなくなっていた。なくなっていたと
いうよりか、最初さいしよからその場所ばしょには存在そんざいして
いなかったようである。

跡形あとかたもない。

その扉とびらがあつたことを完全かんぜんに否定ひていするかの
ように、まったく影かげも形かたちもなかった。

あたりを見回みまわす。まわりの景色けしきは変わかって
いない。足元あしもとを見つめる。一歩いっぽ、退しりぞく。そし
て、視線しせんをあつた場所ばしょに移うつす。
ただ目の前まへには、名なも知らぬ大木たいぼくが、そび
え立たっていた。

ぼくはやはり、夢をみていたのであるうか。
あの少女は、本当に存在していたのである
うか…。

あの出来事すべてが、夢だったのである
か…。

あの少女に対する思い、すべての思いが、夢
であったのであろうか…。

確かにあった。

ここに、扉が…。

古びた白い扉があったはずの場所には、大
きく空に向かってそびえ立つ山桜が、少年の
背丈より高い位置に、白い花を咲かせていた。

その白い花は、とても可憐で清楚な美しさ
であって、花びらは透きとおるような白さを
していた。

けれど少年は、茫然と立ちつくしたまま、
その花の存在には、まったく気づくことがな
かった。

(扉 完)